

岩崎 榮 先生からの 東京だより

平成 30 年 11 月 20 日(火) 14:00~14:30

NPO 法人 卒後臨床研修評価機構 岩崎 榮

聞き手 国病久原会 会長 廣田典祥

廣田) 岩崎先生、お久しぶりです。いつものようにお元気でご活躍のことと思います。

昨年、先生と親交の深かった日野原重明先生が 105 歳で亡くなりました。先生は役職上、日野原先生をはじめ、多方面の医師との交流があられ、いろいろな人から教訓を受けて来られたかと思います。これまでに、最も先生の心の中に残っている方々の教えを、ぜひお聞かせ下さい。

岩崎) いろいろな方との出会いから、沢山のことを教えられました。そのいくつかを紹介しましょう。まず、第一に、日野原重明先生ですね。それから、順に、私が最も影響を受けた方々について触れましょう。以下、1)~4)に示した順番でお話しさせていただきます。

1) 日野原重明先生の教えや先生の著書等から、いくつかのことを学びました。

① まず、次のタマルティ(Tumulty)先生の言葉

「臨床医」とは、病気を診断する、治療することを本来の任務とする人ではない。その本来の任務は、その人間が病気から受ける衝撃全体を最も効果的に取り除くという目的の下に、病む人間をマネージする人である。

「病む人間をマネージする」ということは、病気を診断し、治療することとは全く別のことである。マネージメントとは、患者の人間としての全体像に及ぼす病気のすべての影響、つまり身体的だけではなく、精神的、経済的、社会的影響をも医師が把握し、かつそれらに敏感になる、という意味である。マネージメントというのは、病む人間、その家族、さらに、そのコミュニティを一緒に考えてなされるものである。

(The effective clinician 新しい診断学の方法論と患者へのアプローチ よき臨床医を目指して Philip A Tumulty 日野原重明 塚本玲三 訳(医学書院 1978 年 4 月発行 昭和 53 年)

② 平静の心 オスラー博士講演集

(日野原重明 仁木久恵 訳 医学書院 1984 年発行)

③ さらに、POS の赤本と俗に言われているものをあげておきます。

よい記録: 良い医師は、よい足跡 (good tracks) を残しており、また、良い足跡を見れば、医師の良さがおのずとわかる。

(The Problem-Oriented System 医療と医学教育の革新のための新しいシステム 日野原 重明 著 医学書院)

2) 若月俊一先生からの教え

若月俊一先生から地域医療を学ぶ。ヴ・ナロード「住民の中へ」のスローガンの下で地域医療をやられた。

住民のニーズ要望に応える。医療の基本はそこにある。

3) 沖縄の医療の先駆者 真栄城優夫先生からは、

離島医療を、そしてアメリカでの厳しい教育研修の有り様を学ぶ。

4) 最近では、アメリカのマサチューセッツ総合病院の循環器内科指導医の島田悠一先生から学ぶ。

廣田) 先生は、日野原先生をはじめ、多くの先生方との出会いや対話を重ねて来られてきたこと、また優れた著書を読む機会があつて、以上の様な教訓を得てこられたことがよく分かりました。日野原先生との出会いは当院が国立大村病院と称していた頃(昭和 47 年、1972)臨床研修指定病院を初回の申請で設置するときに、初めてお会いされたと聞いております。

岩崎) 審査が終わりかなと思っていたら最後に、カルテではなく、「チャートを見せてくれ」と言われました。そこで、一番よく書いてある医師の一冊の診療録を見せました。先生は一言「単なるメモですね」と言われた。私は先生のおっしゃることをよく理解できませんでした。

はあ～、これは大変なことになった、指定(臨床研修指定病院)を受けることはできないのではないかとひどく心配しました。その日の日野原先生の全体の講評を、何を仰っているのか上の空で聞いていたように思います。カルテのことだけはその場で何も仰らなかったという安堵感がしたことだけは覚えております。後日、先生にお会いしたときに、POSという本を知りました。その中に、J. W. Hurst 教授(註:当時の米国における心臓病の大御所)が述べた、(良い医師は、よい足跡(*good tracks*)を残しており、また、良い足跡を見れば、医師の良さがおのずとわかる)という一文を読んで思い当りました。そこを読んで私はショックをうけたね。それで、日野原先生が言った「単なるメモですね」と言われた意味がよく分かりました。当時の国立病院の私を含めて、医師達はメモばかり書いていたのかなと。

廣田)ハースト(J. W. Hurst)教授の言葉ですね。なるほど。「良い医師は良い足跡を残す、良い記録を見ればその医師の良さが分かる」と言うのですね。

ところで、前回に先生と対談した時に先生は「医を測る」という本を出されていましたが、「測る」と言うことが本当にどういうことなのか、これは意味が深い、と思っておりました。測る人(評価者)と測られる人(評価を受ける医療者)が居る。

岩崎)「医を測る」の本を編纂したとき、最初から「医を測る」としていたのですが、編集者と議論して「測る」で良いのですかと、「測る」とはあまりにも、良すぎると言われたのですが、最終的に「測る」に落ち着いたのです。

廣田)先生は卒後臨床研修評価機構では「医を測る」という視点でマネージしておられるのですね。

岩崎)ええ、その前の日本医療機能評価機構にいた時に、その着想が浮かんだのです。

廣田)多くの医師は「医は測られるべきもの」ということを意識していないのではないかと思います。現実には医療法だとか国民健康保険法等で医療機関に対する行政指導を受けるということですから、それらの対策に汲々として追われるのも現実で、評価を受けること自体に何か抵抗すら覚えている面があるように思います。それは最低限、医療機関として法的な基準を満たしているかの問題であって、医療の質的な評価には達していない面がある。

岩崎)医療の本質に迫るという意味からも医は測られるべきもの、という認識はまだまだ認識が浅いようです。その後、日野原先生がPOS医療学会を始められて、そのお手伝いをするようになったのです。そこで、日野原先生とのお付き合いが始まって、お亡くなりになるまで続けました。その中で沢山のことを学ぶことができたと思っております。先生はあらゆる人に「平静の心」を持って接しなさいと絶えず言っておられました。先生はオスラー博士から学んで来られたということを知りました。日野原先生がオスラー博士の講演をまとめられた著作集の中に、先ほどあげたタマルティ(Tumulty)先生の言葉ですね、この本は今でも通用する診断学の本ですが、単なる診断学ではない。あらゆることを述べた本です。その、トップにかいてあるのがコミュニケーションです。「コミュニケーションで始まりコミュニケーションで終わる」と書いてあります。そのタマルティ(Tumulty)先生の著書を日野原先生が翻訳をされました。タマルティ先生の言葉は日野原先生の解説によれば、タマルティ先生自身がオスラーの講演から学んだからであると言われま

した。日野原先生は聖路加病院での回診の間では、タマルティ先生が言った、そのものを実践しておられたように思えます。それが「日野原の回診」として大変有名な訳ですね。聖路加病院で育った研修医はその薫陶を得て医師として育ってゆく。私は臨床医として世界的な大変なモデルではないかと思います。それが、タマルティ先生がいうeffective clinician（効果的な臨床医）が養成されるのだと思います。

廣田）effective clinician。なるほど、そうですね。

今、述べておられるような岩崎先生の言葉を文字にして伝えるだけでは勿体ない。生の声として伝授していただいた方が良いでしょう。こうして先生との対談を文字にするだけでお話を十分伝えられるかどうか分かりません。

日野原先生は回診の場面等でも、先生が残された名言集のように、事実、言行一致される方なのですね。暖かい心で、態度で示さないといけない、上から目線で話してもいけないのだよ、とか若い研修医に対してもそのように指導しておられるということがよくわかりました。日野原先生の日ごろのそういう姿勢とか言葉を聞きますと、つくづく反省させられます。

岩崎）ところで、私は最近、「問診」という言葉を無くしましょうよ、と言っております。その「問診」とは一方通行的でしょう。YesかNoを問う様な言葉でインタビューを私どもはしている訳で、それでは患者さんの本当の気持ちが分からないのではないのでしょうか。そこで、私は「問診」は死語であると言っております。「問診」さえすれば、診断がつくと思っている医師達がいまだに多いと思います。

廣田）「問診」は死語であるとは、先生のご指摘は凄いな。凄いです。問診では本当の意味で診断はつけられないということですか。メディカル・インタビュー、医療面接でなくてはならないということですね。

岩崎）そうですよ。

廣田）先生、そろそろ時間が来ました。先生に影響を与えた医師達のこと、まだ半分以上残っています。今日だけでは語り尽くせません。この「東京だより」をシリーズで続けたいので、今後とも何卒よろしくお願い致します。

岩崎）はい、はい。

廣田）先生、ご多忙の中、貴重な時間を割いてこの対談のご協力をいただき、誠にありがとうございました。

岩崎）どういたしまして。お役に立つことが出来れば嬉しいです。